酷

〔東雅十二飲食〕酒サケ○略中　倭名鈔に玉篇に云、醪は、汁滓酒也、漢語抄に、濁醪讀でモロミといふ、說文に云醅は醇未醨也、漢語抄にカスゴメといふ、俗には糟交といふと注せり、モロミの義不詳、我國之俗、凡物の二つなるをモロといひて諸の字を備用ゆ、ミとは實也、凡物の形あるをいふ、猶身といふが如く、古の時にモロミといひしは、汁と滓と二つ相混ぜしをいひ、いまだ沛ざるをカスゴメといひしと見えたり、カスとは糟也、コメとは籠也、猶糟交といふが如し、今の如きは、汁滓の酒をば、濁酒といひ、其いまだ沛ざるものをばモロミといふ、古にいひし所に同じからざるに似たり、

〔倭訓栞中編二十六モロミ〕　和名抄に醪をよめり、鹽みの義なり、童蒙頌韵に醽もよめり、今造醸する者の醬の類にも此名をよべり、酒にいふは今俗に濁酒とするもの也

〔書言字考節用集六服食〕酷字彙、未ナカクミ滓酒也

〔本朝食鑑二穀〕酒

釋名、諸白俗稱上。薫上同。中酌上同、(中略)上薫者新造濁酒之濃香。同。外熏也、中酌者半清半濁之稱也、

〔童蒙酒造記五〕片白酷ナカクミの事

一片白揚前延たる時は、蓋を持て下は清物也、此のごとくの時は、蓋を除、笊籬を當て、酷にして取べし、酒により三分一四分一程は、酷になる物也、酷は清遲き物也、

醴

〔寛政武鑑〕植村出羽守家長○大和高取　時獻上十二月　南都新酒澄。霙。

霙酒

〔筑前續風土記二十七土產〕霙酒　此酒本は南都より釀し出せり、然れ共其味辛し、近世福岡の酒屋鹽屋といふ者、始て甘霙を釀し出せり、是は酒の中に粕交りて、霙に似たるを以て其名とす、味甚甜美なり、近年は他邦に是を賞する、事練酒に劣らず、

〔倭名類聚抄十六酒醴〕醴　四聲字苑云、醴音禮和名古佐介　一日一宿酒也、

〔箋注倭名類聚抄四藥酒〕蓋濃酒之義○略中　按造酒司式云、醴酒者米四升、糵二升、酒三升、和合釀造、○略中　與今俗呼阿萬佐計少不同、○略中　按說文云、醴酒一宿熟也、釋名云、醴齊釀之、一宿而成、醴有酒味而已也、周禮正注、醴猶體也、成而汁滓相將、如今恬酒矣、並與此義同、